

「きぼう」の実践紹介

「きぼう」では、子どもたちが学校生活をおくるのに必要な基本的な日本語を教えています。日本語の力をスモールステップで高めていけるようにカリキュラムを組み、実際の学校生活の場面と結び付けながら、授業を行っています。

今日は「保健室」と「給食」の授業について紹介します。

日本語「保健室」

来日間もない子どもたちであっても、自分の体調について伝えられることは重要です。この授業では、体の部分の名前を覚えたり、具合が悪いことを伝えたりする場面を想定した会話練習を行っています。活動を多く取り入れて、子どもたちが楽しく言葉を覚えられるように工夫しています。

〈1時間の流れ〉

① 体の部分の名称を覚える

実際に体の部分を指しながら、名称を1つ1つ確認します。その後、歌を歌いながら繰り返し声に出して覚えていきます。ある程度覚えることができたなら、ゲームを行います。その際、子どもたちができるだけ多くの言葉を発するように、体の部分のイラストを使った神経衰弱では、カードをめくる度に「頭」「足」など、カードに描かれている絵の名称を言う活動をしています。

② 自分の体調について答えられるように練習をする

健康観察の場面を想定し、「はい、元気です」「はい、〇〇が痛いです」など、体調に合った回答ができるように練習をします。

③ 体温の読み方・熱の有無を答える練習をする

体温の書かれたカードを使って、「熱があります」「37.5度です」と自分の体温について答える練習をします。また、熱があった場合の保健室でのやり取りを想定し、「お母さん、家にいる？いない？」の質問に答える練習もします。慣れてきたら、教師役や保護者役などを決め、子どもたち同士で日本語でのやり取りを練習します。

④ 右手・左手など、細かな体の部分の言い方を覚える

既習の言葉である「右」「左」と、「手」「足」という体の部分を組み合わせて、「右手」「左足」という言い方を学びます。「アブラハムの子(体の部分の名前が出てくる曲)」に合わせて、歌ったり踊ったりしながら言葉を覚えます。

⑤ ワークシートで覚えた言葉を確認する



イラストの描かれたカードを使って神経衰弱をしたり、福笑いをしたりして、楽しく言葉を覚えています！

D ほけんしつ・からだ (2)		月	日	()なまえ
	けがを	しました。		
	ねつが	あります。		
	きもちが	わるいです。		
	かぜを	ひきました。		
ち	ねつを	はかります		
かゆい	36.8ど			
	おかあさん、 いえに いる？ いない？			
いない。		いる。		
	みぎて		みぎあし	

日本語「給食」

食べ慣れていない日本食に対して不安を抱える子は少なくありません。また、日本では当たり前の給食当番ですが、学校で食べる食事を、自分たちで配膳する習慣がある国はほとんどありません。子どもたちが在籍校に登校する際に、戸惑うことなく給食の時間を過ごすことができるように、どのような流れで準備がすすむのか、どのようなメニューがあるのか、食べられないときはどうしたらよいのかなどについて指導をします。

〈日本語「給食①」授業の流れ〉

①日本の学校給食について説明をする

日本の学校には給食があることや、自分たちで配膳を行っていることについて説明をします。給食の意義や配膳の意図もあわせて伝えるようにしています。子どもが納得できるように説明することで、自分たちの文化との違いを受け入れやすくなるからです。この場面では、学校生活の適応を主な目的としているため、バイリンガル相談員の支援を受けながら、子どもたちの母語で指導を行っています。



へらしていいですか。

②給食の時間に扱う言葉を覚える

写真やイラストを提示しながら「給食セット」「大きいおかず」「エプロン」など、給食に関連する言葉を確認します。また、「はし わすれました。かしてください。」「へらしていいですか。」という言い方を練習する活動も行います。



〈日本語「給食②」授業の流れ〉

①給食当番について説明をする

給食当番の仕事がイメージできるように、活動の様子を VTR で見せながら役割や服装など、詳しく説明します。

②エプロンを着る練習をする

「かぶります」「着ます」「はきます」「つけます」といった日本語を覚えた後、実際に給食当番のエプロンを着ます。何のために着用するのかひとつひとつ確認し、帽子やアームカバーの正しいつけ方を練習します。

授業で着たエプロンは、持ち帰って洗濯・アイロンがけをして返却するようにしています。保護者にも当番活動を理解してもらい、在籍校で困ることがないように日本の学校のルールを伝えています。

③ワークシートで覚えた言葉を確認する

中村アナパウラ相談員のブラジル紹介



コロナ禍のブラジルの教育状況

新型コロナウイルスのパンデミックの影響を受け、世界中でロックダウンや学校閉鎖を余儀なくされましたが、ブラジルは最も長い間、対面式授業がなかった国の一つです。

4才から17才の義務教育※の学校で、2020年3月から2021年10月までの間、ブラジル国内の公立学校(国立・州立・市立)と私立学校を合わせて、99.3%の学校で対面式授業が行われなかったという調査結果が出されています。(※2009年より、ブラジルの義務教育は4才から17才までで、幼稚園2年間、初等教育9年間、中等教育の3年間です。)

私立学校の場合、インターネットの環境を整えている家庭が多く、問題なく配信授業やオンライン授業に切り替えることができました。一方で公立学校では、学校内のIT環境が進んでおらず、児童生徒の経済状況も様々なため、オンライン授業を行うことが困難でした。そのため、プリントを家庭に届けたり、メールで送ったりと、各学校で先生たちが工夫して教育活動を進めました。

ブラジルでは、コロナ前から教育格差の問題がありましたが、コロナ禍で問題が拡大しました。IBGE(地理統計院)のデータを基にまとめた報告によると、6~7歳児の非識字率はパンデミック前の2019年時点で25.1%(140万人)だったのに比べて、2021年には40.8%(240万人)に急増しました。特に、貧困層の間で非識字率が跳ね上がったといえます。これは、オンラインに必要な端末やネット環境の充実度などの差が大きく影響しているといえます。

約2年後に学校が再開したブラジルですが、学校に戻らなかった児童生徒や就学しなかった児童数も多く、新たな問題に直面しています。地域の相談員やUNICEFの協力で不就学の子どもたちを探し、学校に戻すように努めています。学校閉鎖期間が長く、多くの公立学校で学習権が順守できなかったため「Continuum Curricular」という連続したカリキュラムが提案され、従来の学習目標を達成するために2年の猶予が与えられています。

コロナ禍の子どもたちは、学びの危機の中にいたといえます。早く穏やかな日常が戻ってくることを心から祈っています。